

随想

長生きと生き甲斐

「長生きをしても、生き甲斐を感じない働き方ではつまらない」

(株)PPQC 研究所 加藤 宏光

《最後の1800年代生まれ、亡くなる》というタイトルで一七歳のイタリア人女性が亡くなったことが報道された(東京新聞・四月二十九日、七面、コラム「親子で学ぶ」より)。記事によれば、ギネス社が世界最高齢とするイタリア人女性《エマ・モラノさん》が四月十五日、イタリア北部の自宅で亡くなった。医師によると、自然に息を引き取ったという。一八九九年にピエモンテ州で生まれたモラノさんは、病気がちだった子ども頃に医者により卵を勧められ、毎日欠かさずに生卵を食べ続けたという。《中略》掛かり付けの医者によると、ここ数週間は話しているより寝ている時間の方が多くなったが、亡くなる前

日もいつものように卵とビスケットを食べた。椅子に座ったまま、静かに最期を迎えた。《生卵を毎日欠かさずに食べて、一七歳長生き》という記事に引かれて、名古屋で有名な二子の高齢姉妹《きんさん・ぎんさん》を思い出した。『きんも一〇〇歳(ヒヤクシャヤ)』、『ぎんも一〇〇歳(ヒヤクシャヤ)』のキャッチコピーで一躍有名になったこの双子の高齢姉妹のうちぎんさんは蟹江家に嫁ぎ、昭和七年に採卵養鶏を営んだという。当時の養鶏は近代化される前のもので、いわゆるアラ養鶏といって、魚のアラとコーンや糠、青菜を毎日自分で配合して与える、大変な労働であった。

それにしても、イタリアで一七歳、日本で一〇八歳まで長生きした人々が共に卵を毎日食べていた、というニュースは心強い。長生きをしても、生き甲斐を感じない人生を送っているのは幸せとは程遠い。前に著者の父親世代の生き様と生き甲斐について触れた。四月二十九日号、週刊現代に《働かなくなった日本人の末路》という記事が目をつけた。過激な表現で《多少引いて見る》ようにしている週刊誌であるが、少なからず共感するところがあったので、引用してみる。まず、タイトルに付随している副題も目を引く。いわく、

● 国民必読・言いたくても言えない正論  
● 世界の人は知っている『そんなに休んで、どこへ行く?』  
● 数字で見ると、実は先進国一の怠け者に  
● 『働きすぎは悪』『仕事よりコンプライアンス』—日本全体がそんな方向に進んでいる。しかし、本当にそれでいいのか。  
● 『働き方改革』とは『働かない改革』  
● 資源のない小国のニッポン、急速な人口減が進む中、こんなに休んで大丈夫か  
● 大小の文字でうたっているこれらの諸問題は、著者世代がいつも感じていることと何かしら一致する。

巻頭から五頁にわたるこの特集の内容を章別にまとめてみる。

生き甲斐となっていた。そんな雰囲気が高成長経済成長の原動力になっていた」と語る。

★ モーレッツがそんなに悪いのか? ・日本政府の《日本人は働きすぎ》という主張は、先進国の適当労働時間に比較しても当たらない「日本・三七・七時間に対して、アメリカ・四二時間、イギリス・四一・四時間、ドイツ・四〇時間、フランス・三七・八時間、カナダ・三七・一時間となっている」OECD調べ」にもかかわらず、安倍総理も『モーレッツ社員の考え方が否定される日本にしていきたい』と言う。しかし、豊かな日本はモーレッツ社員の頑張りがあった。また、元松下電器社員、東海大元教授の小野豊和氏は『一九七〇年代、高度成長時代では、多忙なときは徹夜が当たり前、残業も苦ではなかったし、そのため体調を崩すこともなかった。仕事が楽しくて、もっと働きたいと思ったものです—中略—あの頃は多くの人が仕事にやり甲斐を感じ、社会のためになるという思いがあり、それが

★ 官僚や学者に言われたくない—前略—官僚上がりや世襲政治家は民間企業の最前線が血の滲むような努力をしていることを知らず、机上の空論で『モーレッツ社員は時代遅れ、ほとんど働いて人生を楽しみましよう』と指導する。結果日本の衰退という末路に導かれるのはどうしたものか?  
★ 東海銀行専務、名古屋大学客員教授の水谷研二氏は『働かないで豊かさだけを得られるのか? 働かないで豊かな生活がほしいと言っつのは、虫が良すぎ』と語る。

★ 世界は必死に働いている—日本の「一人当たり労働生産性」はOECD加盟国中で二位、G7では最下位である。先の水谷氏は『国際的に落ちている技術的優位性を回復するには、むしろもっと働いて技術を磨かねば。いったん楽を覚えると頑張りがたくても、体も知力もなくな

ってしまっている。日本人が世界に誇った勤勉さはどこへ行ってしまったのか。城南信用金庫元理事長、吉原毅氏は『若いときは残業も休日出勤もした。大変でも達成感や満足感が大きく、長時間労働も苦ではなかった。私にとって仕事は楽しいものだったから…労働時間を減らそうというのは『仕事は苦役だから減らそう』という思想。《仕事を再び楽しいものに直すこと》が『働き方改革』の目指す方向性』と指摘する。

★ 楽ばかり求める若者たち—前出の小野氏は『一九八〇年代の日本では、年間二、一〇〇時間働いていたため、世界の平均値一、八〇〇時間程度に減らせ、という外圧もあり、政治指導でこれに近づけた。今、若者は人生に目標を持たず、仕事は生活のための手段に過ぎず、より福利厚生が充実して楽な仕事を選ぶ。労働時間を規制しては、人材は育つまい』という。また、伊藤忠商事元会長、中国大使を務めた丹羽宇一郎氏は『もっと

昔のように汗を出せ、知恵を出せ、もっと働け、と言うしかない』と断言する。  
この引用文には、著者が日頃感じていたことが網羅されているように思われる。かの女性のように長生きをしても、生き甲斐を感じられる働き方を追い求めてほしいものである。  
前号で取り上げた古いファイルの中に《生きがいの夜明け》という論文の別刷りが出てきた。二〇年以上前の論文であるが、経営者としての観点から見て興味深い内容である。  
その詳細は次号以降に触れるとして、論文の緒言を少し引いてみよう。  
前略…経営者や管理職者が『労働意欲を高めるための試みで、労働者の価値観を心底から変えて単なる働き甲斐でなく、本質的な変化を生じさせたいと模索している…』というものである。しばらく働き甲斐について考えてみたい。